

将東遊 壁題す

秋

月

性

男児志を立てて 郷関を出ず

学若成る無くば 復還らず

骨を埋むる 何ぞ期せん墳墓の地

人間到る 処青山有り

【作者】釋月性(一八一七〜一八五六年)(文化十四年〜安政三年)。江戸末期の詩僧。周防国の人。勤王の志を持っていた。

釈は、釈門の意。蛇足なるが、同時代人に月照(西郷隆盛とともに錦江湾に入水)がいるのに注意。

【語釈】*東遊…月性が大阪の篠崎小竹のもとへ旅立とうとした時になる。 *郷関…故郷の村の門。日本の鳥居に似た感じ。転じて、故郷。

*無成…成就することが無ければ。 *不復…二度とは…ない。再びはない。 *何期…どうして期待しようか。どうして願おうか。

どうして希望しようか。反語。反問。 *人間…世の中。浮き世。社会。 *青山…墓所とする青山。墓所。

【通釈】東の方に旅立とうとして、壁に詩を書いた。

男たるべき者が志を立てて、故郷を出立したからには。学問が、もしも、成就することが無ければ、二度とは帰ってこない。骨を埋めるのは、どうして故郷の地であることを望もうか。人間には、いたるところに墓所とすべき青山があるのだ。